とあるハヤテの一日

farjoker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるハヤテの一日

【Ｎコード】

Ｎ１３１８Ｈ

【作者名】

ｆａｒｊｏｋｅｒ

【あらすじ】

風が治ったハヤテは学校に向かうが何やら調子がおかしくて・・・ナギ、ヒナギク、三人娘を攻略します！

（前書き）

初めてのハヤテ小説です！

「今日はいい朝だなぁ」
のんびりと起き上がる我らが主人公綾崎ハヤテ。しかし今の彼は常の何だか締まりのない笑いではなく爽やかな笑みを浮かべていた。
これが後の『綾崎事件』の始まりである。

「しかしハヤテは大丈夫か？昨日珍しく風邪を引いていたから休ませたが」
そういう金髪ツインテールは三千院ナギ。自分とハヤテは両思いだと信じているお嬢様だ。
「ハヤテ君ならあの程度の風邪寝ていれば治りますよ」
ピチピチの年頃な十七歳の若メイド、マリアは言った。といってもハヤテの熱は四十度オーバーだったのだが。
「そうだな！何せ私が昨日作ってやったお粥もあんなにおいしそうに食べていたしな！」
マリアに嫌な予感が襲ってくる。
（そういえば昨日クレンザー無くなっていましたね・・・）
「まぁ私が見てくるよ」
ナギはマリアにそう告げ部屋を飛び出した。

「ハヤテ～大丈夫か～」
「おはようございます。お嬢様。この通り大丈夫です！」
ハヤテはいかにも元気ハツラツみたいなノリで言うと何かに気付いたようにナギの頭をみる。
「お嬢様。寝癖があります。今直しますんで動かないでください」
ハヤテはそう言うとまるで召還したかのように櫛を取り出し髪を梳かし始めた。
「なあハヤテ、顔が近すぎないか？」

どぎまぎしながらナギは言う。
「これくらい近くないと直せませんよ」
とかいうハヤテだが美容院の店員がそんな距離でやったらセクハラとしか言えない距離である（床屋は除く）。
（ハヤテの吐息が首筋に！耳に！）
当然思春期であるお嬢様には刺激が強すぎるので何とか距離をとってもらおうと
「ハヤ・「でもお嬢様ってホントかわいいですよね～」
ハヤテの不意打ち＋夏のスポーツ少年顔負けの爽やかな笑み＋ナギの恋人補整によって絶大な威力を持つ武器となった一言はナギのハートを撃ち抜きナギは真っ赤に顔を染め倒れた。

ナギを寝かせ学校へとハヤテは向かった。
「ちょっとハヤテく～ん」
上から声がし、見てみると高いところとお化けだけが苦手な完璧超人桂ヒナギクが木から降りられなくなりお化けに囲まれていた。そこからは例のごとくハヤテがキャッチ。しかし問題はそこからだった。
「ハヤテ君？降ろしてくれない？」
そう。ハヤテは受け止めたまま歩きだしたのだった。
「迷惑ですか？」
「べっ、別に迷惑じゃないけど・・・」
「なら続けさせてください。その方が僕は嬉しいので」
ナギの様に気絶することはなかったものの髪のピンクが薄く見える程ヒナギクは赤くなった。教室に着く頃には口説き文句とお姫様抱っこによって茹でダコ状態となり降ろされるやいなや自分の机に突っ伏してしまった。当然見ていたハヤテに想いを寄せる笑顔が仕様ないいんちょさんレッド瀬川泉は不機嫌そうな顔をする。ハヤテはそれを見て近づく。

「瀬川さん。どうしたんですか？笑ってください」
「ほえ？」
唐突にかけられた言葉に驚く泉の頬に手を伸ばしなぞるように動かしながら耳元で
「泉さんには笑って欲しいんです。僕は笑顔の泉さんが好きですから」
さりげに名前呼びにシフトし爆弾発言。泉も机に突っ伏した。
「なんかハヤ太君。今日おかしくないか？」
「確かに」
ブルーとブラックこと朝風理沙と花菱美希は分析を開始する。
「お～い。ハヤ太君。キミは私にぞっこんだろ？」
「待て理沙！今のハヤ太君にいつもと同じ態度をとったら！！」
美希は気付くが時既に遅し。
「そうだとしたら朝風さんはどうしたいんですか？」
あっという間に近寄りギリギリ尻には触れていない位置の腰に左手を回す。
「うわっ！？」
「答えてください。理沙さん」
珍しく少女のような叫びを上げる理沙。それを更に抱き寄せ顎に右手を当て向き直させるハヤテ。性別的には正しいのだが少年のような少女が少女のような少年に口説かれているのは端から見ると何か危険だ。
結局突っ伏している女子が三人に増えた。
「ヒナ、泉、理沙、仇はとる」
今や最後の砦となった美希は立ち上がる。
「ハヤ太君！！」
「何でしょうか？」
いつもの不幸少年スマイルはどこにやったのか美少年（美少女）スマイルを浮かべ振り向く。美希の後ろで数人の女子と虎鉄が倒れた。
しかし美希は倒れない。さすが巷では百合といわ

「違う！使命感だ！！」
熱く燃え上がる使命感を胸にキッと睨みつける。
（私はハヤ太君が好きな訳でもないしフラグも立っていない！行ける！！）
「何で睨まれているか分からないんですけど・・・」
だが美希は答えない。冷静に状況を判断しー

チュッ☆

「これで許してくれませんか？」
「なっ何を！？」
慌てて額を抑える美希。そうハヤテはおでこキャラ禁断の領域『おでこにキス』を行ったのだ。
「あっ満足できません？」
再び美希に近づき・・・
「待ってくれ！ハヤ太君！！そういう訳じゃ・・・」その後ハヤテは美希を攻略。白皇はパニック状態に陥ったという。

―次の日
「ふぁ～よく寝たな～。ってもしかして丸一日寝てたのか、僕は！？」
驚愕するハヤテに更なる驚きが押し寄せるのはまた別の話である。

（後書き）

本当は咲夜やハムスターとかも攻略させたかったんですけどこれ以上グダグダになりそうなんでやめました。あっ・・・マリアさん攻略してない・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1318h/

とあるハヤテの一日

2010年11月8日09時28分発行